

## 朝鮮半島を読む

京成電鉄を利用しているが、いつ頃からか駅名表示や車内アナウンスなどで日本語・英語・中国語・韓国語が使われるようになってきた。何気なく車内アナウンスを聞いて、停車駅の駅名表示を見ている内に「ハングルの表記」と「ハングルの読み方」が気になって、韓国語の教本を雑学の一環として買った。適当なところまで進んだところで、予想通り挫折し会話レベルには至らなかった。

ハングルはともかくとして、「朝鮮半島そのもの」についても多くの疑問や興味がありはするが、これまでに知り得た知識の範囲が狭いため、疑問解消や理解には至らないことが多い。小学校・中学校・高校と学問を重ねる間に教えられて頭に残っている知識や情報が浅く狭い上に、大人になってから得たものもかなり少ないように思う。

二、三年前に「少し朝鮮半島のことに興味を持ってみよう」と思い立ち、書店に通い始めた。そしてこの数年の間に何冊かの本を読んでみたことで、少しではあるが前に進むことができたように感じている。

## ◆歴史認識とは何か 大沼保昭著 中公新書

何らかのテーマで日韓・日中の中で、しばしば問題になる「歴史認識」。

素人（ひとりひとりの一般国民）から見れば、「歴史の認識」とはということなのかはわかりにくい。

前述の二国との間では、先方が問題にする「歴史の認識」は、「我が国の政治姿勢としての歴史認識」と異なっているが、一般国民の目からは何が問題なのか理解しにくい。

著者は国際法を中心とした分野の専門家で、この本は江川紹子氏が聞き手となつての対話形式で書かれている。

本題に入って最初のテーマが「ニュールンベルグ裁判と東京裁判の比較」なので一瞬驚きを感じたのだが、第二次大戦の中での「ドイツが果たした役割とその責任」と「日本が果たした役割とその責任」とについてを比較しながら述べている。

次に、サンフランシスコ講和条約と戦後処理の様々な場面に触れながら、日中国交正常化及び日韓国交正常化を目指した両国間の政治家の往来に触れている。

特に韓国との間には、日清戦争後から第二次大戦終結までの「日本による支配」という問題が挟まっており、さらに複雑化している。

我が国の歴代内閣がこの問題にどのように対応してきたかについても語られており、自民党が政権の中心にあった時代とそうでない時代とがあり、その時代ごとの対応の仕方にも差が出ている。

しかし、我が国の首相が対外的に発したメッセージは生きて伝わり残ってもいるが、棚に上げられていたり無視されているものもある。

一方韓国でも、政権が変わる度に様々な変化があり、残り続ける概念もあれば形骸化したものもある。そんな流れの中で、事実関係を検証しながら考察を示している書だった。

## ◆朝鮮に渡った「日本人妻」 林典子著 岩波新書

著者は1983年生まれのフォトジャーナリスト。

第一章に出てくる井出多喜子さんは、1927年宮崎県高鍋町の農家の長女として生まれた。戦時中で男性は兵隊になってしまい、労働力が足りなかったため15、6才でバスの運転手になった。職場の運転手仲間の6才年上の男性と出会い、やがて結婚することになった。この男性は朝鮮人だったため、家

族から祝福されない結婚になってしまった。1948年に長男が誕生、1950年に長女が誕生し、この頃になってようやく実家との行き来ができるようになった。

井出多喜子さんの夫であるサ・デスン(史大順)さんは、日本統治下の朝鮮半島のチョルウォン(鉄原)で生まれた。16才で単身日本に渡り、戦時で男性の労働力が不足していた九州の炭鉱で働くことになったが、本人の意思で日本に渡ったのか否かは今や不明らしい。後に見知らぬ夫婦と知り合い、可愛がってもらい、自動車の運転技術などを習得。日本人としての名は、清松大順と言った。

1961年の帰国事業で、一家は北朝鮮の東海岸にあるウォンサン(元山)へ渡った。サ・デスン(史大順)さんが生まれた鉄原は38度線の北側にあったため、朝鮮戦争の結果の南北分断により帰国する先が北朝鮮になった。

我が国の朝鮮半島や大陸への進出や進攻により、軍人に限らず軍需産業・資源開拓事業などで多くの日本人が海を越えて渡ることになった。

また、日清戦争の結果日本の属国となった朝鮮からは、多くの人が日本に渡ってきた。職を求める者であったり、学問のためであったり様々な理由があった。

そして、日本人と旧朝鮮人との結婚が双方の地において発生した。

後に第二次世界大戦があり、朝鮮戦争があり、今の世につながるのだが、数多くの断ち切られたルーツを持つ人が生まれてしまった。日本・韓国・北朝鮮の三つの世界に分断された家族が沢山……。

この書は、6年に渡る訪朝取材を経て得た情報をまとめた「何人かの日本人妻の足跡」を辿ったものだが、氷山の一角にもなっていないと思う。

歴史年表の中に書き記されることもないような出来事なのかもしれないが、一人一人の立場から見れば、歴史が犯した罪の結末とも言うことができるのではないかな。

#### ◆日本統治下の朝鮮 木村光彦著 中公新書

1895年の下関条約によって終結した日清戦争の結果、「朝鮮(李氏朝鮮)は清国から独立」「台湾・澎湖島・遼東半島の一部は日本に割譲」となった。そして1910年日韓併合条約を締結して、大韓帝国は日本の領土となり、第二次世界大戦が終るまで続いた。

この間のことをまとめた書籍としては、山辺健太郎著「日本統治下の朝鮮」が存在した。この書は一貫して「朝鮮人の民族的尊厳をそこなった」という見方に徹しており、ややイデオロギー的に偏りがあったとして、東アジアの経済論を専門とする木村光彦氏が統計データとその実証確認を経てこの書をまとめたという説明が冒頭にあった。

厳しい自然環境の中で営まれる低生産性の農業を中心とした産業構造だった国が、日本の統治下に置かれたことで鉱工業や高生産性農業へのシフト(近代化)をすることができた。そしてそれが、現在の韓国の発展につながっているのだと説明している。

一方、韓国内には「日帝七奪」という言葉もあり、日本の植民地となったことで奪われたものは「国王・主権・土地・資源・国語・姓名・生命」とする見解も言い伝えられているので、気をつけて読み取る必要がありそうである。

李氏朝鮮の時代にどんな営みが出来ていたのか、日本の影響力が進む時期にどんな変化が生まれたのか、日本の影響力がなくなった後でそれがどうなったのか。また南北分裂によりどう変化していったのか、など様々な分野について様々な角度から見ていかないと正しくは理解できないように感じた。

#### ◆韓国を支配する空気の研究 牧野愛博著 文春新書

著者は朝日新聞の前ソウル支局長。朝鮮半島にくすぶる様々な問題の背景にある物を探っている。

いくつかの事例を題材にして、表面的な事象と後に潜む「韓国ならではの背景」を解き明かしている。韓国社会の特長や韓国文化とそこにある出世主義・英才教育と不正入学、権力と賄賂、被害者意識の過剰なまでの燃え上がりなどなどの社会現象の病巣とも言うべきものにも触れている。

さらに、南北問題・対米関係・軍事的独立指向などの歴代大統領の重点政策の相違点と、その中での日韓問題の位置づけにも触れている。大統領の出身政党・出身母体と主要政策及び対日スタンスのとり方などの違いを示しながら解説されている。大統領が交代する度に、前任の大統領は何らかの理由で投獄されることが多く、この道を歩まなかった大統領の方が少ないというのも、日本人の目から見ると不思議な感じがする。

我が国が手中にし、支配したことがある国であり、また遡れば「我が国の成立」にも大きく関わってきた国であるが、あまり多くを教えられてはこなかったし、多くを知ってはいないことを強く感じた。

#### ◆日清戦争 藤村道生著 岩波新書

ここまで来たところで、我が国が朝鮮半島を手に入れることになった日清戦争について再学習しておく必要を感じ、読む順番としては逆になってしまったが、書架にあった古い本を取り出してみた。1973年発行の岩波新書で、内容についての記憶があまりないので、父が買ってきたものだと思う。

著者は当時九州工業大学の助教授、日清戦争や日露戦争に関する研究を重ねてきた人。

序文の中で、「開戦理由に説得力なし」「政治的には失敗の戦争」と評している。この本は、日清戦争には三つの局面があったと述べて始まっている。

第一番目は「帝国主義列強による極東分割を意識して、事前に朝鮮を制圧して清国の影響力を排除しよう」というもの（清国との間の武力闘争）、第二番目は「中国及び朝鮮の分割をめぐる列強との競争」（陸奥宗光による外交）、そして第三番目は「出兵・占領地域における民衆抑圧」。

第一の局面では、軍事が政治を侵略して戦略の観点で政略の観点より優越していた上に、清国の中でも后党と帝党の対立があった。第二の局面においては、帝国主義候補国である日本と清国が帝国主義の列強の仲間入りするか従属国に転落するかを戦いでもあった。第三の局面は、日清戦争は朝鮮における反侵略・反封建の農民運動に始まり、台湾の抗日義兵闘争の鎮圧で終わったことにも示されるように、戦争の全過程を支配していた。

また我が国では、この戦争の経緯や結果は国民には一部（第一番目の局面の一部）しか知らされず、国民は歓喜に酔い踊らされた側面もあるとしている。

日清戦争の延長線上に日露戦争があり、そしてその先が第二次大戦・太平洋戦争につながることになる。つまり、我が国が無益な戦争で多大な犠牲を払うことになった原因を遡って行くと日清戦争に辿り着き、その引き金になったものは「明治維新と明治政府の政策」というふうに読むことができる。

巷間言われる「明治維新の位置付けとその価値評価」ではあるが、冷静に見直してみると……。

#### ◆なぜ必敗の戦争を始めたのか 半藤一利著 文春新書

行きがかり上、我が国が戦争に走った経緯や経過をおさらいしてみるのも良かろうと思って書店の棚を物色していて見つけた。表題に惹かれてこの本を買ってしまったが、読んでみたらがっかりだった。

「何故勝ち目のない日米戦に踏み込んだのか」という切り口で、陸軍エリート将校 OB の座談会をそのまま文字化したもので、商品としての書籍に求められる「読みやすさ」「読みたくなるような書き方」という点で、残念な仕上がりに感じた。著者は昭和史を語る第一人者とも言われている人で、テーマとしては興味深いものではあるが、読み物としてのまとめ方に一工夫必要だったのではないかな。

◆朝鮮半島と日本の未来 姜尚中(カン・サン・ジュン)著 集英社新書

日本の学校を出て、日本で仕事をする韓国人の政治学者。しかも日本の新聞や雑誌の紙面にかなり登場しており何度か読んだことはあるが、まとまった一冊の本を読んだのはこれが初めての経験。

読み終わってみると、読まれやすい文章で読みやすかった。しかし総花的に様々な視点からの見方が示されている反面深さがやや足りない感じがした。日本で活躍する韓国人ならではの鋭い切り込みを期待したが、やや摩擦を恐れたかのような遠慮が感じられた。(深謀なのかもしれないが)

朝鮮半島の中にある最大の問題である「南北分断」、この問題に関わる歴代政権の動きと最近の動きに触れ、次なるテーマ「日韓関係」についても同様のアプローチで語っている。

金大中と金正日が握手をした南北戦争終結50周年の年に、南北問題は新たな展開を向かえるのかと思われたが、韓国政権は交代し北朝鮮もリーダーが交替。

日朝間に拉致問題が表面化、韓国の政権交代、アメリカにトランプ政権などなど様々な変化が起きてきた。そして今、アメリカでは政権交代と新大統領の登場、韓国では大統領任期も終りが近づき次の動きが始まる時期、日韓関係は再び急速に悪化、さてこの先はどうなることか？

◆韓国を蝕む儒教の怨念 呉善花(オー・ソン・ファ)著 小学館新書

不可逆的に最終合意をしたはずの慰安婦問題が再び蒸し返された。また、すでに日韓基本条約で合意に達したはずの徴用工問題で韓国の最高裁が、日本企業に賠償を求める判決を出した。

国家間で出来上がった合意事項を覆すような極めて不自然な動き方をする韓国という国。

この他の、韓国内外で起きたいくつかの出来事を例題として、その奥に潜むものを探っていくという本で、著者は日本の大学で学び日本の大学の教授でもある評論家。

時代を遡っていくと、現代・日帝支配時代・李朝朝鮮の時代、さらに遡っていくと……

奥に潜むものは、朝鮮人の精神に大きく影響している「儒教・朱子学の教え」にあるとしている。親子関係・組織とその中の上下の関係・国家間の関係・勝負事における対決関係・加害者と被害者の関係などなど、様々な事例を参照しながら解説している。

この書の副題として「反日は永久に終わらない」と付されているように、深いところにまで根ざしており簡単に解決できるような問題ではないだろうとしている。

なるほどと頷ける節もあるが、こうも見事にすべてのことをここに帰結させてしまうのは乱暴ではないのかなと感じるところもあった。

◆反日種族主義と日本人 久保田るり子著 文春新書

著者は産経新聞編集局編集委員で、國學院大學客員教授。産経新聞社入社後、韓国延世大学に留学、1995年に防衛庁の幹部養成コースの防衛研究所一般課程を一般人として修了し、2003年から5年間ソウル支局特派員を務めた。2019年に韓国社会に衝撃を与えたベストセラー「反日種族主義」(著者=李栄薫イ・ヨンファンほか)の日本語版刊行に尽力した。

「反日種族主義=日韓危機の根源」ととらえて、日韓の間に横たわるいくつかの問題に様々な角度から切り込んで書いている。李承晩・朴正熙時代、全斗煥・盧泰愚時代、金泳三以降の時代など、歴代大統領の立ち位置の違いなどに触れながら、現在の文在寅政権に至るまでの道のりを、徴用工問題や慰安婦問題を中心とした日韓問題と南北問題とを並べながら述べて、背景にあるものを探っている。ここまでで読んだ書籍に記されていたものと重ね合わせると、一層難解で混迷を深めるばかりのような気がしてきた。